医療保健学研究　6号：57-68頁（2015）
ISSN 2185-2227

症例・実践報告

大学教員と IBCLC (国際ラクテーションコンサルタント) 助産師による母乳育児支援の授業からの学び

中田久恵[1]，大槻優子[1]，纐纈祐子[1]，高橋弥生[2]，山田千恵[2]

[1]つくば国際大学医療保健学部看護学科
[2]つくばセントラル病院看護部

【要　旨】本研究は、大学教員と臨地実習指導者による母乳育児支援に関する授業の学びを明らかにすることを目的とした。A大学看護学科３年次の母乳育児支援の授業に出席した学生70名のレポートを質的に分析を行った。

その結果、【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】【ポジショニングとラッチオンの重要性】【母親の自信につながる具体的支援方法】【母親としての疑似体験】【自己の母乳育児への意欲】【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】【看護職者としての理想像の明確化】【母親・家族への感謝への気持ち】の８つのカテゴリーが抽出された。

授業の学びとして、母乳育児を身近にとらえ、具体的な援助方法の取得をすることが出来ていた。近年、少子化や実習施設の減少による臨地実習での経験が減少している看護基礎教育において、大学教員と臨地実習指導者との協働による授業方法は、母乳育児支援の具体的な方法のみならず、看護として必要なコミュニケーション能力のような基本的技術までも含まれ、効果的であったと言える。

キーワード：母乳育児支援，実習指導者，IBCLC（国際ラクテーションコンサルタント），質的分析

序　論

近年の周産期を取り巻く環境は、分娩数の減少、早期退院、不妊治療後の妊娠・出産など変化が著しい。そのため、妊娠・出産・育児に対する女性とその家族の意識や価値観も多様化してきている。その影響もあり、母性看護学を学ぶ学生が臨床経験をする機会は減少しており（羽根田他，2010；菊地他，2010）、新卒者の看護実践能力の向上が重要課題となっている。一方、厚生労働省は看護教員の在り方に関する検討報告書で、看護基礎教育における実習の質の向上を目的とし、看護基礎教育機関と臨床との連携の必要性を提案しており（厚生労働省教育内容と方法に関する検討会報告書，2011）、文部科学省においても看護学教員の看護実践能力の向上や大学と実習施設との協力と連携の必要性を提言している（文部科学省：看護学教育在り方に関する検討会報告書，2002）。いずれも、臨床と

連絡責任者：中田久恵
〒300-0051　茨城県土浦市真鍋6-8-33
つくば国際大学医療保健学部看護学科
TEL：029-826-6622
FAX：029-826-6776
Email: h–nakada@tius.ac.jp

教育の乖離を解消し、看護の実践と教育・研究とが連携し、看護教育ならびに臨床看護の質に臨床看護の質の向上を図っていくことが求められている。

わが国では、質の高い看護職の養成を目的として、臨床と教育の協働、つまりユニフィケーションの提言が1980年代からなされている。しかし、その導入には実習施設の協力と理解、実習指導者の時間と労力の確保など困難を伴うことが多く（高田，2001）、普及が進んでいないのが現状である。そのため、臨床と教育のユニフィケーションに関する研究も少ない。これまでの研究では、ユニフィケーションを行った精神看護学演習の臨床指導者の指導体験の意義（草地，2012）や実習指導者と教員の協働に影響する要因（椎葉，2010）の調査など、実習指導者側からの評価が明らかにされている。いずれも、学生にとっては臨場感をもった学習の機会となり有効であったと報告されている。一方、学生側からのユニフィケーションの評価としては、看護過程演習（大園，2011）や基礎看護技術演習（竹下，2014）などがある。しかし、母性看護学領域における研究は少なく、IBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）の資格をもつ実習指導者との協働授業を評価した研究は行われていない。

平成26年度、看護学科を有する大学数は228校（旺文社情報センター，2014）にも及んでおり、看護師養成教育機関に附属した実習施設を持たない医療系大学、看護学科等が年々増加している。このような現状において、臨地実習施設の開拓や実習指導者との連携は重要な課題である。この課題解決のために、大学教員と臨地実習指導者とのユニフィケーションによる指導は、臨床と教育の乖離を解消し、より実践に近い教育が可能であると考える。

Ａ大学では大学教員と IBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）の資格をもつ臨地実習指導者との協働による、母乳育児支援に関する授業を実施した。母性看護学を担当する大学教員と臨地実習指導者とのユニフィケーションによる授業による学びは、産後の入院期間の短縮や少子化による影響で臨床での経験が減少している学生にとって、実践に近い学習を行うことができると考える。

本研究の目的は、大学教員とIBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）の資格をもつ実習指導者によるユニフィケーションによる母乳育児支援に関する授業から学生がどのような学びをしたかを明らかにすることである。

方　法

調査対象

平成25年度看護学科３年生76名（女子学生62名、男子学生14名）を対象に母性看護学援助論30コマの中で“母乳育児支援における援助方法”の授業を後期に２コマ行った。表１にＡ大学に

表１． Ａ大学における母性看護学の履修時期

科目名	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期
母性看護学概論		2単位 ↔						
母性看護学援助論 （演習：子宮底・腹囲測定・レオポルド触診法・新生児の観察・沐浴・母乳育児支援）					2単位 ↔	母乳育児支援		
母性看護学実習							2単位 ↔	

おける母性看護学の履修時期を示した。

“母乳育児支援における援助方法”の授業後に、授業に関する学びのレポートを76名が提出した。成績評価後の当該学生が4年次に提出したレポートの質的分析を行うことを学生らに説明し、そのうち同意が得られた70名のレポートを対象とした。

授業内容

授業科目「母性看護学援助論」において、母乳育児支援の講義を1コマ、その後に演習を1コマ実施した。この授業は、3年次の母性看護学援助論において、妊娠期・分娩期・産褥期にある女性と新生児、その家族の看護について知識としての学習をし、母乳育児支援に関しての専門的な知識と技術を習得する目的で行った授業である。授業前に、教員は助産師と授業内容の打ち合わせを行い、母乳育児の具体的な支援方法の修得を学習目標として設定した。

講義は助産師が中心となり行い、演習は教員が母親役割、助産師が支援者役割を演じ、授乳時のアセスメントの具体的な内容と方法(表2)についてのデモストレーションを行った。その後、学生は各グループに別れ、母親役割、支援者役割、観察者役割を担い、全ての役割を学生が体験するようにした。その際に、学生が母親役割、支援者役割をスムーズに実践できるようにシナリオ“人形を使っての演習”(表3)を作成し、シナリオに沿って演習を行った。シナリオは、支援者役の学生自らが自分の言葉で説明できるように、また母親役の学生も説明や支援を受けて、自由に反応ができるように大筋の流れのみを記述した。

調査方法

「母性看護学援助論」の母乳育児支援の授業を受けた後、「授業で学んだこと、気づいたこと」と題したレポートを提出してもらった。その後に、レポートを研究対象とすることを口頭と書面にて説明を行い、同意書の提出をもって研究への協力が得られたこととした。

分析方法

「母性看護学援助論」の母乳育児支援の授業後に提出したレポートの“学生自身が気づいたこと、新たに学んだこと”の中で、母乳育児支援の演習に関する内容の記述を選択した。選択した記述の意味内容を損なわないようにコード化した。コード化したものを文章の意味の同質性・異質性に基づいて分類した。分類したコードの意味が同質なものをグループ化して、代表的なコードを選択し、サブカテゴリーの命名を行った。さらにサブカテゴリ―を抽象化してカテゴリーを抽出した。

研究代表者及び研究分担者2名が、数例のレポートのコード化の過程を共有した上で、それぞれの他のレポートのコード化を行った後、全レポートの全コードについて文脈を確認した。研究者がサブカテゴリー、カテゴリーへの抽象化を行った際、研究分担者間の討議により信用性の確保に努めた。

倫理的配慮

研究対象者(対象学生)に対し、プライバシーの保護としてデータとするレポートは匿名化し、本研究で得られたデータは本研究の目的以外には使用しないこと、研究協力を行うことで生じる母性看護学に関する質問、相談等は研究者および研究分担者(大学教員)のオフィスアワー内で対応可能であること、研究協力はあくまで個人の自由意思であり、協力をしないことによる成績評価等の影響はなく、なんら不利益がないことを文章および口頭で説明し同意を得た。なお、本研究はつくば国際大学倫理委員会の承認(第26-7号)を得た上で実施した。

表２．授乳アセスメントの具体的な内容と方法

≪アセスメントの流れ：あいさつ⇒母親から話を聴く⇒観察≫

a. あいさつ、母親から話を聴く
- 支援者は、母親にあいさつをし自己紹介をする。母親と赤ちゃんの名前を尋ねる
- 母親に自由回答方式で話を聴く
- 現在の授乳がどんな調子か尋ねる
- 支援者自身も座って、リラックスして心地よく、支援しやすい体勢をとる

b. 直接授乳を観察し記録する
- 赤ちゃんがどのように母乳を飲んでいるかを見てもよいか母親に尋ねる
- いつもどおりに赤ちゃんに乳房を含ませてもらう
- 観察後、母親の上手くできている点を見つけて、言葉にする

c. 母親、赤ちゃんの全体の様子
- 母親の全体をみる: 年齢、全体の様子
  ［健康か⇔健康そうでないか］［幸せそうか⇔悲しそうか］［落ち着いているか⇔緊張していないか］
- 母親と赤ちゃんのきずなが認められているか:目を合わせているか
  ［自信を持って危なげなく赤ちゃんを抱いているか⇔赤ちゃんと目を合わせていないか］
  ［赤ちゃんを恐々抱いているか⇔いないか］
- 赤ちゃんの全体をみる:全身の状態　［覚醒しているか⇔眠っているか］［穏やかか⇔泣いているか］
- 鼻閉や口蓋裂のような哺乳に影響しうる何らかの状態はないか
- 赤ちゃんはどのように反応しているか:空腹の時に乳房を探すか
  ［母親に寄っていくか―母親から離れようとするか］

d. 乳房の観察
  例: 乳房の発赤、しこり、緊満の状態の変化、授乳後の乳頭の形など
- 乳房の理学的所見をとる時は、何をするのか説明をする
- 母親が心地良いと感じるようにプライバシーを保証し、慎みに対する文化的配慮をする
- 乳房を出してもらったり触れたりする前には、母親の許可を得る

e. 赤ちゃんの体勢
- 耳、肩、腰が一直線になり、首がねじれたりうつむいたり、のけぞったりしていないか
- 乳房を赤ちゃん近づけるのではなく、赤ちゃんを乳房に近づけて母親の体に密着させる
- 赤ちやんを乳房に近づけるときは、赤ちやんの鼻と乳頭を向き合わせる

f. 授乳中の吸着
- 赤ちやんの上唇の上部の乳輪はよく見えていて、下部のほうはあまり見えていないか
- 目が大きく開いているか(140～150度)
- 下唇が外向きに開いているか
- 下顎が乳房に触れている

g. 赤ちゃんの哺乳
- ゆっくりとした深い吸啜がみえるか
  ［穏やかな嚥下音か― 舌打ちやあえぐような音が聞こえているか］
  ［赤ちゃんの頬は膨らんでいるか― 哺乳中頬が内側にひきこまれたりしていないか］

h. 母乳をあげている感じはどうか
- 何らかのオキシトシン反射のサインがあるか、例えば乳汁が漏れたり、じんじんしたりするなど
- 何か不快感や痛みはないか
- 赤ちゃんが適切に吸着して効果的に哺乳しているならば、母親の授乳のやり方に介入しないようにする
- 観察している要点を母親に話し、母親が自信が持てるように、また母乳育児がうまくいっているかどうか母親が自分でわかるようにする

表３． 人形を使っての演習（シナリオ例）

支援者役	母親役
・挨拶をする。自己紹介をして、母親と赤ちゃんの名前を尋ねる。 ・母親にどんな調子かを質問する。	椅子に座っている。授乳するときは、赤ちゃんを『悪い姿勢で』抱く。緩く抱いていて、赤ちゃんの頭だけをささえ、赤ちゃんの体は母親の身体から離れていて、母親が身体を前にかがめないと赤ちゃんの口に乳房が届かない。
・「赤ちゃんがどのように母乳を飲んでいるか、見てもいいですか」と尋ね、いつもどおりに赤ちゃんに乳房を含ませてもらう。	
・自分も座って、リラックスして心地よく、支援しやすい体勢をとる。	
・数分間、授乳を観察する。	
・「おっぱいをあげている感じはどうですか」と母親に尋ねる。	「赤ちゃんに吸われると痛い」と言う。
・授乳を観察した後、何か元気づける言葉をかける。	自由に反応する
・何が助けになるかを説明する。	
・実際にやってみせてもよいかを尋ね、援助を申し出る。	
・母親役にポイントを伝える。次の提案をしたり、やり方を伝えたりする前に、１つひとつの提案を実際に母親ができるように助ける。	支援者役が説明をするのに合わせて、心地よくリラックスした姿勢をとる。
・４つの要点を説明する。 ①赤ちゃんの頭と体を一直線にする ②母親は赤ちゃんの体を自分の体に密着させる ③赤ちゃんの体全体を支える ④乳房に赤ちゃんの顔を向けて、鼻と乳頭を向き合わせる	椅子の背にもたれて座り、足を支えると楽。必要ならクッションや枕を使い赤ちゃんを胸の高さで抱く。
・「母親役」が赤ちゃんをまっすぐ乳房のほうを向けて、密着して抱けるように助けてから、赤ちゃんが吸いつけるように、どのようにして乳房を手で支えるかを見せる（布製の乳房模型を使う）。	自由に反応する
・吸い付かせ方を説明して赤ちゃんが吸着できるように支援する。	

結　果

調査対象となった学生は女子58名、男子12名であった。提出された70のレポートを“学生自身が気づいたこと、新たに学んだこと”を分析視点とし、記述から235のコードが抽出された。コード化したものの中から母乳育児支援の演習に関する内容のコードを選択し、意味の類似性や異質性により分類を行い、52の代表的なコード選択した。その結果、意味内容から28のサブカテゴリーが説明され、【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】【ポジショニングとラッチオンの重要性】【母親の自信につながる具体的支援方法】【母親としての疑似体験】【自己の母乳育児への意欲】【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】【看護職者としての理想像の明確化】【母親・家族への感謝への気持ち】の８つのカテゴリーが抽出された(表４)。以下、本文において、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、学生の記述であるコードを『』として表記する。

【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】

［母乳育児に関する知識の啓蒙］［アセスメントの重要性］［知識・観察項目の把握］［乳房ケアの知識］［支援する側の環境調整］の５つのサブカテゴリーで構成された。産後に行う授乳の支援には、妊娠中からの関わりが必要であることに学生自らが気づき、『病院など支援する環境が増えると良いと思った』など、産後支援の体制を整えることの必要性を理解していた。

【ポジショニングとラッチオンの重要性】

［ポジショニング(授乳姿勢)の難しさを実感］

表4-1． 演習で新たに学んだこと、気づいたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
妊娠中からの継続的な知識提供の必要性	母乳育児に関する知識の啓蒙	出産前にしっかり知識・技術を身につけることが必要である
		積極的に母親学級等に参加することも大事なことだと強く感じた
	アセスメントの重要性	出産の前後の身体的な変化や心理的な変化も同時に観察し、アセスメントしていくことが必要であり、さらに新生児の観察も平行して行っていくことが必要だと学んだ
		母親から授乳の調子や出産の経過などを直接聞くことも必要になる
	知識・観察項目の把握	赤ちゃんがしっかりおっぱいを吸っているか観察しながら、母親の様子、気持ちを聞かなくてはいけないため、知識・観察項目をしっかり把握しておくことが大事だと分かった
	乳房ケアの知識	乳輪のはりを和らげる方法なども必要不可欠な知識であるため、覚えておきたい
	支援する側の環境調整	母親教室などで助産師あるいは看護師が教育をする機会はあると思うのに、広まっていないということはとてももったいない
		父親や家族が知る機会があればいいのにと思った
		病院など支援する環境が増えると良いと思った
		経産婦さんとの交流の場もあると嬉しいと思った
ポジショニングとラッチオンの重要性	ポジショニング（授乳姿勢）の難しさを実感	同じ体勢、姿勢のまま授乳を続けることがどれほど大変なのかわかった
		ポジショニングのアドバイスをするにしても戸惑ってしまい、母親にも不安が伝わってしまっているのではないかと感じた
	クッションやタオルを用いての安楽な姿勢を体感	バスタオルを膝の上に置くだけで腕への負担がかからず、すごく楽になると分かった
	ポジショニングやラッチオンなどのポイントの習得	ポジショニングやラッチオンなどの身体の向きや吸いつかせ方があり，赤ちゃんの頭と体を一直線にすることが全体を支えるなどのポイントがあることを知った
		母親の方からおっぱいを加えさせるのではなく，赤ちゃんから探り当ててくらえてくるよう促すのが正しいやり方だと学んだ
		母子にあったポジショニングを支援することで母親に身体的安楽を与えると同時に、母乳育児に対する自信につながると感じた
母親の自信につながる具体的支援方法	母親にあった個別性の援助	一番大切なのはその親子にとって最も適している授乳方法であり、何が正解というわけではない
		その親子が一番授乳しやすい方法を一緒に考えていくことが支援者の重要な役割である
	褒める	とにかく褒めてあげられるところを探し、褒めた上でアドバイスをすることが大事だと教わった
		母親の精神的ケアや今後の親子関係や子育てのことまで考えて支援をするという大切さがわかった
		肯定的な言葉をかけ受けとめることで母親も相談しやすくなることがわかった
	母親の思いに寄り添う	思いをため込まないで話しやすくなるような雰囲気づくりをし、母親の思いに共感することが重要だと感じた
		母親の気持ちを大切にする支援（エモーショナル・サポート）が大切だとわかった
		演習のように「このようにして～すると良いですよ」と言われるとその場で母親の不安が軽減できるのではないかと思った
		具体的にポイントを伝え支援をすることで、母親も授乳に対して意欲がわき、不安も軽減することができると考えた
	母親のセルフケアを促進させる	育児に悩んでいる母親には支援という方法で母親のセルフケアを促進し、母親が自分で意思決定していけるようにすることが大切だと学んだ
母親としての疑似体験	母親としての嬉しさ	赤ちゃんを褒める言葉をかけてくれるとすごく嬉しい気分になった
	母乳育児の楽しさ	母親や子にとって楽な授乳方法や使用道具を見つけることによって、授乳という行為を少しでも楽しくできることができるのだと感じることができた
	初産婦の気持ちの理解	実際に演習で体験して初産婦の気持ちが理解できた

表 4-2． 演習で新たに学んだこと、気づいたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
自己の母乳育児への意欲	パートナーとしての支援（男子学生）	将来結婚し子供ができたらパートナーの支えになれるようにしたい
	母乳育児希望の芽生え	将来、自分でも母乳育児ができるのではないかという少しの自信がわいた
		実際に母親になった際は人工乳ではなく、母乳育児がしたいと考えた
	育児への関心	看護師としてだけでなく、, いつか母親になる女性として育児について考えた
具体的なコミュニケーションスキルの気づき	言葉遣いへ気づき	言葉遣いにも気を付けることが円滑なコミュニケーションに繋がるとわかった
		簡易な言葉を使用し、母親の理解度を確認しながら支援していくことを学んだ
	目線を合わせることでの安心感	母親役を通して、上手に赤ちゃんに授乳することができない不安に対して、支援者が目線の高さを合わせて話しをしてくることで安心感に変わった
	挨拶の重要性	「挨拶→母親から話しを聴く→観察」という流れに添って行うことを学んだ
		挨拶の段階で笑顔で明るく接することで母親の不安は軽減することを実感した
	声かけの必要性	肯定的な言葉をかけてもらうと、とても気持ちが楽になり次はもっと頑張ろうと感じた
		支援者の一方的なアドバイスではなく、母親の不安や悩みを聞きながら、母親のペースに合わせ必要なことを必要なだけ伝えることも重要だと学んだ
	環境づくり	患者の言いたいことをはっきりと言うことができる環境づくりも看護者としての重要な業務の一環だと考えた
		母親の視界に常に新生児が入っていることによって危険を未然に防ぐことにもつながることを学んだ
		看護師は直接、褥婦の身体や新生児に触れてはならないことを学んだ
看護職としての理想像の明確化	母乳育児支援のやりがい	母親から悩みや相談を聞き、それに対応した支援は大変そうだが、とてもやりがいがあるのではないかと感じた
	看護師の将来像	お母さんにもわかりやすく教えてあげられるような看護師になりたい
		相手に安心感を与えられるような看護師になりたい
		心配疑問を持つ母親に、自分がもっている知識を精一杯使って安心できる子育てができる環境を提供できる看護師になりたい
		これから患者との関係を良好にしたり、より治療に意欲的に取り組んでもらったりするため、患者の良いところ探しをしてみようと思った
	助産師への憧れ	助産師の資格もいつかとりたいと思っているので、助産師の資格もとってもっとこの分野について学んで行きたいと改めて思った
母親・家族への感謝の気持ち	母親への感謝	痛い思いをしながら育ててくれた母親には常に感謝しないといけないのだと感じた
	子を思う親の気持ちへの気づき	自分の幼い時の話を聞き、両親だけでなく家族へ感謝の気持ちが膨らんだ
		私はこんなにもいろんな事を考えて育てられたということを今回初めてわかった

［クッションやタオルを用いての安楽な姿勢を体感］［ポジショニングやラッチオンなどのポイントの習得］の３つのサブカテゴリーで構成された。学生自身が母親役の体験を通して、『同じ体勢、姿勢のまま授乳を続けることがどれほど大変なのかわかった』、『バスタオルを膝の上に置くだけで腕への負担がかからず、すごく楽になると分かった』等、ポジショニングによる身体への影響を理解していた。さらに、ラッチオンのタイミングやコツを学習することで、母子にあった援助を行うことは母親に身体的安楽を与えると同時に、母乳育児に対する自信をもってもらうことができるということに気付いていた。

【母親の自信につながる具体的支援方法】

［母親にあった個別性の援助］［褒める］［母親の思いに寄り添う］［母親のセルフケアを促進させる］の４つのサブカテゴリーで構成された。母乳育児において母親に自信を持ってもらうことが母乳育児の成功に繋がることに気づき、『とにかく褒めてあげられるところを探し、褒めた上でアドバイスをすることが大事だと教わった』など、具体的な支援方法を学んでいた。そして『具体的にポイントを伝え支援をすることで、母親も授乳に対して意欲がわき、不安も軽減することができると考えた』、『育児に悩んでいる母親には支援という方法で母親のセルフケアを促進し、母親が自分で意思決定していけるようにすることが大切だと学んだ』など、母親の思いに寄り添うことで、セルフケアを促進することにつながることにも気づくことができていた。

【母親としての疑似体験】

［母親としての嬉しさ］［母乳育児の楽しさ］［初産婦の気持ちの理解］の３つのサブカテゴリーで構成された。母親としての疑似体験から、『赤ちゃんを褒める言葉をかけてくれるとすごく嬉しい気持ちになった』など、素直に母親の立場を感じ、考える機会となっていた。

【自己の母乳育児への意欲】

［パートナーとしての支援(男子学生)］［母乳育児希望の芽生え］［育児への関心］の３つのサブカテゴリーで構成された。女子学生は、『将来、こんな私でも母乳育児ができるのではないかという少し自信がわいた』など、将来体験し得る可能性がある母乳育児に対し興味、関心を抱いていた。男子学生は、『将来結婚して子供ができたらパートナーの支えになれるようにしたい』など、男性として将来のパートナーに対する支援に意欲をみせていた。

【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】

［言葉遣いへの気づき］［目線を合わせることでの安心感］［挨拶の重要性］［声かけの必要性］［環境づくり］の５つのサブカテリーで構成された。母性看護のみならず、『言葉遣いにも気を付けることが円滑にコミュニケーションをとることに繋がるとわかった』、『肯定的な言葉をかけてもらうと、とても気持ちが楽になり次はもっと頑張ろうと感じた』など、看護においてのコミュニケーションスキルの具体的な方法を学生自身が母親役、支援者役を通して学んでいた。

【看護職としての理想像の明確化】

［母乳育児支援のやりがい］［看護師の将来像］［助産師としての憧れ］の３つのサブカテゴリーで構成された。授乳支援の演習を通して、『これから患者との関係を良好にしたり、より治療に意欲的に取り組んでもらったりするため、患者の良いところ探しをしてみようと思った』等、看護職としてのやりがいや自分自身がなりたい看護師像を描くことができていた。また、助産師という職種への興味も芽生えていた。

【母親・家族への感謝の気持ち】

［母親への感謝］［子を思う親の気持ちへの気

づき］の２つのサブカテゴリーで構成された。母親の疑似体験や授乳という行為の支援の方法を学習する中で、『私はこんなにもいろんな事を考えて育てられたということを今回初めてわかった』等、学生自身の母親や家族が、どんな思いで自分を産み育ててくれたかを推測し、母親や家族への感謝気持ちを改めて感じていた。

考　察

大学教員とIBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）助産師の教育と臨床の協働による母乳育児支援についての授業の学びを明らかにした。学生のレポートの質的分析から８カテゴリー抽出された。以下に８カテゴリーの特徴を考察する。

具体的な母乳育児支援方法の習得

【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】【ポジショニングとラッチオンの重要性】【母親の自信につながる具体的支援方法】の３カテゴリーは、母乳育児支援の具体的な内容を示すものであり、母乳育児支援におけるポイント（日本ラクテーション・コンサルタント協会，2007）の一部である。助産師による母乳育児の専門的な講義や実際的な状況設定による演習を通して、母乳育児支援の重要性を認識することができていた。しかし、学生は臨地実習において授乳する母子に初めて接するということが多く、その場面に直面すると戸惑うことがある。竹下ら（2014）が、「臨床との協働の目的は、学生にとっては、看護技術の原理原則を習得することに加え、臨床での看護技術の適応場面や患者への配慮を学習することである」と報告している。今回の調査結果においても、授業を受けたことにより支援者として必要な知識と技術の必要性について学習できたと考えられる。また、授乳場面のみならず、妊娠期における授乳支援の必要性に気付き、妊娠期から産褥期への継続看護の必要性を考える機会になっていた。

母性を育む機会

【母親としての疑似体験】【自己の母乳育児への意欲】の２カテゴリーは、母親役を通して学生の母性性が引き出され、自らの母性性に気づく体験となっていた。少子化、核家族、晩婚化に伴い、授乳を行う女性に触れ合う機会が少ない学生にとって“母親になる”という疑似体験は、自分の将来を想像し、男子学生においてはサポート役としての自己を想像することに繋がった。

WHO（世界保健機関）は「母性とは、現に子どもを産み育てているもののほかに、将来子どもを産み育てるべき存在、および過去においてその役目を果たしたもの」と定義している。これから子どもを産み育てる成人期にある学生の母性性を育む効果があったと考える。

基礎看護技術としてのコミュニケーションスキルの習得

【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】というカテゴリーからは、母乳育児支援という母性看護に特化した内容の授業であっても、基礎看護教育において必要不可欠な技術の修得につながる効果があると確認された。サブカテゴリーの［言葉遣いへの気づき］［挨拶の重要性］［声かけの必要性］は、言語的スキル、［目線を合わせることでの安心感］［環境づくり］は非言語的スキルを示しており、机上の知識からだけではなく、体験してスキルを習得したということがわかった。看護の領域のみならず、様々な分野でも必要とされるコミュニケーションスキルの活用の有効性に気づき機会になっていたと言える。

ロールモデルとしての役割提示

【看護職としての理想像の明確化】として抽出

されたカテゴリーは、実習指導者であり臨床で活躍する助産師による授業によって、［母乳育児支援のやりがい］のみならず、看護職としての将来像をより具体的に描く機会になっていた。斉藤ら(2008)は、ユニフィケーションとして臨床看護師の参加した演習が学生にとって卒後のイメージ作りに役立ち、より現実感を持って演習に臨めるといった効果があることを示唆している。今回の結果からも、教育と臨床の現場の乖離を減らす機会となったと推察できる。

学生自身が自分を振り返る機会

提出されたレポート内に【母親・家族への感謝の気持】の記述が多くみられた。これは授乳という行為を通して、自分も大切に育てられたのだということに気づく機会になっていた。母親をはじめとする家族への感謝の気持ちは、自己肯定感を高め、自己を大切にし、他者を敬うことに繋がるのではないかと考える。

研究の課題と今後の課題

本研究の結果により、大学教員と実習指導者との協働による授業の学びが明らかになった。今後、大学教員と実習指導者との協働授業の効果を明らかにするため、協働授業を受けた学生を対象に、母性看護学の臨地実習においてどのような効果があったのか、臨地実習後の評価を含めた研究を行う必要がある。

まとめ

本研究では、大学教員とIBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）助産師による母乳育児に関する授業の効果として、【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】【ポジショニングとラッチオンの重要性】【母親の自信につながる具体的支援方法】【母親としての疑似体験】【自己の母乳育児への意欲】【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】【看護職者としての理想像の明確化】【母親・家族への感謝への気持ち】の８項目が学生のレポートより抽出された。これらのカテゴリーは、具体的な母乳育児支援方法の習得と母性を育む機会となっていた。さらに基礎看護技術としてのコミュニケーションスキルの活用の有効性に気付く機会となっていた。また、臨床に立つ看護師・助産師としてのロールモデルとしての役割提示ができたと考えられた。また、母親や家族への感謝の気持ちを頂き、学生自身が自分を振り返る機会にもなっていたことが推察された。

謝　辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

大園孝子(2011)「実習前の小児看護過程演習における一学生のわかり方」に関する研究―一学生へのインタビュー分析から―．鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要．15:73-82.

旺文社　教育情報センター(2014) http://eic.obunsha.co.jp/resource/pdf/educational－info/2014/0107.pdf（閲覧日：2014年11月21日）

菊地美帆，中島通子，高島葉子，弓納持浩子(2010) 母性看護学実習における学生の技術経験状況と今後の課題 母性看護学実習技術経験録より．母性衛生(会議録)．51:168.

草地仁史，楫野由美子，光貞真弓，山根俊，磯村聰子 (2012)精神看護学演習に参加した精神科看護師の指導体験の認識．第42回日本看護学会論文集.精神看護．254-256.

厚生労働省ホームページ．厚生労働省医政局看護課(2011)看護教育の内容と方法に関する

検討会報告書.
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000013l0q-att/2r985200000013l4m.pdf
（閲覧日：2014年1月21日）

斉藤理恵子(2008)ユニフィケーションで高める看護教員の臨床実践力　学校と臨床が共に作り上げるユニフィケーションシステム．神奈川県立がんセンターとの連携．看護展望．33(13) 1258-1265.

椎葉美千代，齋藤ひさ子，福澤雪子（2010）看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因．産業医科大学雑誌．32(2)：161-176.

高田法子，平岡敬子（2001）ユニフィケーションモデル(Unification Model)の検討―臨床と大学の連携と協働の可能性―．看護総合研究．2(2)：1-8.

竹下美恵子，滝内隆子，小松妙子，岡本千尋，渡邉郁子（2014）臨床看護師との協働による看護技術教育の学生による評価．岐阜看護研究会誌．6：43-52.

羽根田公江，久保阿綾香，山崎トヨ（2010）埼玉県内の看護教育機関における母性看護学領域の実態体験調査の結果報告．埼玉医科大学短期大学紀要．21：49-60.

ＮＰＯ法人日本ラクテーション・コンサルタント協会（2007）母乳育児支援スタンダード．医学書院.

文部科学省ホームページ：看護学教育の在り方に関する検討会報告書（2004）
http://www.mext.go.jp/b－menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm（閲覧日：2014年9月21日）

Report

A study from the lectures carried out by the university faculty and midwives in IBCLC (International Lactation Consultant) regarding breastfeeding support

Hisae Nakada[1], Yuko Ootsuki[1], Yuko Kouketsu[1],
Yayoi Takahashi[2], Chie Yamada[2]

1 Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tsukuba International University
2 Tsukuba Central Hospital

Abstract

The present research aims to reveal the study through lectures of a breastfeeding support which is carried out by the University faculties and clinical training instructors. We conducted a qualitative analysis based on reports from 70 students who participated to the lectures of the breastfeeding support. The targeted students are third-year students in School of Nursing in A University.

After the practice, the study analyzed the students' reports with a focus on "new learning and awareness". For ethical considerations, we provided documents explaining the study and obtained their consents in writing. The analysis extracted eight categories: "necessity to continuously provide information from pregnancy", "importance of positioning and latching-on", "specific support method that brings out confidence in mothers", "simulated experience as a mother", "willingness for her own breastfeeding", "awareness of specific communication skills", "clearer image of an ideal nurse", and "appreciation for their own mother and family".

As a result of a study from the lectures, the students were able to feel familiar with the breastfeeding; in addition, they gained skills in practical manner of the support. Recently, experiences of clinical practice in the basic nursing education have decreased due to the declining birthrate and the decrease of training facilities. The method of lectures based on the collaboration between University faculty and clinical training instructors is seen as positive impacts. This is because, it includes not only practical manner of the breastfeeding support but also basic techniques such as communication skills that nurses are required to have.

Keywords: Breastfeeding support, IBCLC (International Board Certified Lactation Consultant) Midwife, Qualitative analysis